



エズラ Pedro Berruguete

これらの事があって後、ペルシアの王アルタクセルクセスの治世に、エズラがバビロンから上って来た。エズラの祖先は、父がセラヤ、祖父がアザルヤ、更にヒルキヤ、...ピネハス、エルアザル、そして祭司長アロンとさかのぼる。エズラは、イスラエルの神なる主が授けられたモーセの律法に詳しい書記官であり、その神なる主の御手の加護を受けて、求めるものをすべて王から与えられていた。(エズ 7:1)最初の帰還から 60 年以上たってから、エズラが帰還しました。(ダレイオスから三代後のアルタクセルクセスの治世は 475~424BC です。)エズラは、由緒正しい祭司の家柄に生まれ、能力の高い書記官でした。アルタクセルクセス王はエズラを高く評価し、財政的援助はもとより、ユーフラテス西方の支配者、裁判官を任命する権限をエズラに授けていました。けれどもエズラは帰還に当たっては、王の保護に頼ろうとせず、まず断食をし、神に祈って、恵み溢れるその御手が必ず差し伸べられると信じて、行動を始めた信仰の人でもありました。

神殿は完成しましたが、ヘブライ語を理解できない世代も増え、エズラは民の信仰教育のため、

- (1) 主の律法を研究して実行し、イスラエルに掟と法を教えることに専念しました。(学者)
- (2) 神殿に仕えるレビ人の勧誘をし、レビ人に奉仕する使用人を集めました。(経営力)
- (3) バビロンからの帰還者の家長と一族の記録をしました。(実務力)
- (4) 祭司長の中から神殿の金銀、祭具を寄託する信用のおける人選をしました。(人事力)
- (5) 王の親書を地方総督や長官に渡し、イスラエルに支援を取り付けました。(政治力)

律法の専門家として、イスラエルの歴史、伝統を再構築する要の存在でした。また、政治的にも絶大な権威を帯びていました。エズラの一言、一言は強大な影響力、感化力を発揮したのです。

ナショナリズムが高揚すると、国粹主義、排外主義が持ち上がります。これがエズラに降りかかった問題でした。

このような事があって後、長たちがわたしのもとに来て、言った。「イスラエルの民も、祭司も、レビ人も、この地の住民から離れようとはしません。カナン人、ヘト人、ペリジ人、エブス人、アンモン人、モアブ人、エジプト人、アモリ人と同様に行うその住民の忌まわしい行いに従って、彼らは、自分のためにも息子たちのためにもこの地の住民の娘を嫁にし、聖なる種族はこの地の住民と混じり合うようになりました。しかも、長たる者、官職にある者がこの悪事にまず手を染めたのです。」わたしはこのことを聞いて、衣とマントを裂き、髪の毛とひげをむしり、ぼう然として座り込んだ。

バビロン捕囚から 130 年以上もたっていれば、ユダヤの地に残った人々は現地の人々と共に暮らし、助け合い、共存共栄せざるを得ません。また、バビロンに捕囚された人々も、当地のカルデア人、メディア人、エラム人と共に暮らしました。宗教的、文化的交流があり、結婚による民族的な混交があるのは自然なことです。けれども、律法に堅く立つ、几帳面で、清廉潔白なエズラの真意に背くのではと、エズラを尊敬する人々が心配し始めました。庶民の日常生活を知らなかったエズラは衝撃を受けました。ユダヤ人の信仰生活にどんな弊害があったかは記されていません。異民族との結婚、異民族との同盟による繁栄は「忌まわしい行い、悪」とされていますから、エズラは、それを罪と感じ、苦しみました。そのため異民族との絶縁、すなわち、異民族の嫁を持つ男子に、離縁を要求したのです。反対する人もいましたが、すべての男子の調査が行われ、この決定は実行されました。子を産んだ嫁も当然いました。ネヘミヤ記にも同様のことが記されていて、過激な民族主義の恐ろしさを痛感させられます。「安息日(律法)は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」

(マル 2:27) とのイエス様の言葉を思い出します。